

検索手段としての民具の標準名

—農具の歴史を踏まえて—

河野 通明

1 標準名は広域比較のためのバーコードシール

標準名は広域比較の必須の条件 民具の標準名の設定に関しては反発や消極的な意見も多いが、標準名の設定は民具のデータベース化の前提として民具研究側で整えておかなければならない課題であり、民具のデータベース化は民具の広域比較を可能にして、停滞気味の民具研究に風穴を開ける効果が期待されるものである。

標準名の体制を早くに整えて研究を蓄積してきた分野に植物や昆虫を対象とした生物学がある。動植物の場合はリンネの自然分類にもとづくラテン語表記の属名・種名を並べた国際標準の学名があり、このラテン語の学名に対応する標準和名の必要性が誰の目にも明らかであったためか、たとえば牧野富太郎のような中央の研究者の設定した標準和名もすんなりと受け容れられ、全国の研究者や理科の先生たちが地域の野山に分け入って標準和名の動植物の確認とその過程での新種の発見の報告を重ねた結果、動植物の種ごとの全国分布が把握され、そのベースの上に今日に分子生物学やDNA研究が聳え立っている。この場合、新種の発見を支えたのが標準和名の設定とそれにもとづいた全国比較であるが、植物図鑑には標準和名のほかに可能な限りで地方名も入れられていて、標準名と地方名は何ら対立関係にはない。

立ち後れの著しい民具の広域比較 民具と並んで物的資料を扱う考古学は、世界的にも確固たる歴史をもつ学問であり、文化財保護法のもと、開発には事前の発掘調査が義務づけられることもあって研究者人口は多く、土器の研究も時代ごと地域ごとの形態の違いや分布状況は詳しく調べ上げられていて、学界の共有財産となっている。それに比べて物的資料としての民具の広域比較研究は著しく立ち後れていて、たとえば古代以来、日本の基幹産業であった稲作農業を支えてきた牛に引かせる犁についていえば、河野が全国調査のデータをまとめてようやく分布図を作成する段階にさしかかったが、それが最前線という状況であり、考古学と比べても動植物分野と比べても著しい立ち後れで、その達成率は何百分の1、何千分の1といった超低いレベルなのである。

標準名は民具に貼り付けるバーコードシール 民具の標準名の設定に関する反発感情の背景には、明治以降学校教育を通して展開された標準語化政策が、方言をきたない言葉、間違った言葉として排除しようとしてきたことの歴史的経験が二重写しになっているのではないかと推定されるが、民具の標準名設定は、かつての標準語化政策とはまったく異質なものである。

今日、スーパーマーケットでは野菜に巻き付けたテープにも肉のトレイにかけたラップにもバーコードシールが貼り付けられていて、そのお陰でレジでの会計時間が短縮され、店側にも在庫管理ができてわれわれの生活の便利さを支えている。この場合バーコードシールを貼り付けたことは野菜や肉の味や品質に何の影響も与えておらず、食の安全性を脅かすわけでもない。民具の標準名もこのバーコードシールのようなもので、方言で呼ばれ方言でカードに記入・登録されていた民具にパッケージの上から検索用のバーコードシールを貼るだけの話であって、民具にもとづく地域研究に何らの影響を及ぼすこと

2009年(平成21年)4月23日



図1 新聞で使われる日常語化した「民具」

版	刊行年	記述内容
第1版	1955 (昭和30)	民具の項なし
第2版	1969 (昭和44)	昔から民衆が日常生活に用いてきた道具・器具
第3版	1983 (昭和58)	民衆の日常生活用具の総称
第4版	1991 (平成3)	民衆の日常生活用具の総称
第5版	1998 (平成10)	民衆の日常生活用具の総称
第6版	2008 (平成20)	民衆の日常生活用具の総称

図2 『広辞苑』の民具項目の変遷

もないばかりか全国比較が可能となって、民具研究に新たな展望を開くものであり、民具の標準名設定が地域研究を阻害するのではないかと心配は杞憂にすぎない。その点を理解し誤解にもとづく躊躇を払拭して、未来に向かって標準名化を進めようではないか。

2 民具の再定義

ここまで当然のように「民具」という言葉を使ってきたが、「民具とは何か」は民具研究者間では懸案の課題であり、かつ民具と道具とはどう違うのかという外部からの疑問に答える必要も出てきている。この点について、簡単に考察しておきたい。

「民具とは何か」の議論の有効性 民具は元はといえば渋沢敬三らによって創出された造語であり、「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」(『民具蒐集調査要目』1936)と定義された学術用語であった。私が日本民具学会に入会した1980年代初めのころは学会内で民具とは何かの議論が盛んにおこなわれていたが、これに対しては距離を置いて議論には参加しなかった。その理由は、そもそも何を研究するかは個々の研究者が自分の関心にもとづいて選ぶものであり、そこで規準は研究者自身が研究を必要と感ずるか否かであって、民具であるかどうかで研究対象を選んでいるわけではない。いいかえれば民具研究の最前線ではどの範囲の道具を民具と呼ぶべきか否かは問題とならないのである。

このことは民具を収集し管理する立場にある市町村の現場でも同じである。収蔵スペースが限られた現状のなかで市町村民から民具の寄贈の申し出があった場合、何を収集し何を断るかの選択規準は、将来の市町村民にとっての必要性、その資料が市町村の暮らしや歴史を語る資料として重要かどうかであって、その道具が民具と呼ばれているか否か、学会団体が民具と認めているか否かは問題とはならないのである。そして市町村の暮らしや歴史を語る資料として集められた道具類が結果として「民具」と呼ばれているのである。

学術用語から日常語へ 日本民具学会内部での民具をめぐる研究者の議論を尻目に、世間では「民具」の日常語化が急速に進んでいた。図1は2009年4月23日の『朝日新聞』の記事で、見出しは「民具は語る ソ連の生活」。原発事故で無人となったチェルノブイリ市取材したもので、映画館の建物には文化遺産保護研究センター所長らが20年かけて集めた「家具、衣服、食器、楽器」など「ありとあらゆる民具や生活用品であふれかえっていた」という。この担当記者は日本民具学会の会員でもないにもか

ならず、外国の生活用具もごく当たり前のように民具と呼んで日本の読者向けの見出しにまで使っているのであり、編集部のかびしいチェックも通過して大新聞の紙面を飾るまでに民具は日常語化しているのである。

こうした民具の日常語化は、かなり早くから進んでいたようだ。図2は日本を代表する国語辞典である『広辞苑』で民具がいつ項目として取り上げられ、その解説文がどう変わってきたかを一覧表にまとめたものであるが、これによれば民具が初めて『広辞苑』に取り上げられたのは1969年の第2版からで、「昔から民衆が日常生活に用いてきた道具・器具」と解説しており、1983年の第3版からは、「民衆の日常生活用具の総称」と簡潔で要を得た解説で通している。注目したいのはこの1969年（昭和44）という年次で、1976年の日本民具学会の創立より7年も前であり、各地で歴史民俗資料館が建設ブームとなる70年代に先立って、『広辞苑』に取り上げられるほど「民具」が一般に使われはじめていたことになる。

このように学界内部での研究対象としての民具の範囲をめぐる議論とは無関係に、世間では民具の日常語化が急速に進んでいたのであり、全国各地の博物館・資料館や教育委員会の担当者間で日常的に交わされる「民具の展示」「民具の収集」「民具の整理」「民具の保存」といった場合の「民具」も「民衆の日常生活用具の総称」というぐらいの意味で使われていて、日常語化した民具の系列上にあることは明らかである。民具という言葉が研究者の手を離れ一人歩きを始めて40余年、いまや民間に広く定着してごく普通の日本語となっているのである。

民具の枠を一気に広げた時代の変化 この10年ほど、昭和30年代ブームで、ローラー式絞機をついた洗濯機やまだ小振りだった電気冷蔵庫、初期の団地の暮らしなどが展示されることが多くなった。これらの家電製品もまた昔を思い起こさせる懐かしい民具となったのであり、民具は手作りのものに限るべきか否かなどの議論をも過去に追いやってしまった。各地で歴史民俗資料館がつくられ日本民具学会が創立された1970年代には誰も民具とは考えなかった家電製品、そしてその存在すらなかったパーソナルなワープロ専用機も今や懐かしい民具と認めざるをえない現実がある。これは学界での議論が深まった結果ではなく、時代の変化がそうさせたのであり、われわれは時代に翻弄されるちっぽけな存在にすぎないことを思い知らされた一件であった。

そこで民具が日常語化している現状と市町村の暮らしや歴史を語る資料として収集された道具類が結果として「民具」と呼ばれている現実をふまえ、かつ時代の変化が民具の枠を広げていくという原理を取り込んでまとめたのが図3「民具」の再定義の第1項、

① 民衆の使う道具のうち現役を引退して地域の歴史や暮らしの語り部となったもの。昔の道具。という定義で、こうしておけば民具の範囲をどうすべきかという線引きの議論はせずに済むことになる。

道具と民具の違い もう1点、2003～07年度の神奈川大学21世紀COEプログラムでは文化人類学者から「河野は民具、民具というが、道具ではないのか」と問われたことがあった。周りが民具、民具と言っている民具学会に身を置いていた時には出会わなかった新鮮な問いかけで、他分野の人との共同研究の必要性を肌で感じた瞬間だった。そこで民具と道具はどう使い分けてられてきたのかを整理してみ

みんぐ【民具】

① 民衆の使う道具のうち現役を引退して地域の歴史や暮らしの語り部となったもの。昔の道具。

② 現役の道具も形態や呼称のなかにそれが発達・進化してきた歴史や地域の暮らしの情報をもっており、その情報に注目した場合は現役の道具であっても民具と呼ばれる。

図3 「民具」の再定義

道 具	民 具
現役中は道具	引退すれば民具
不要になれば粗大ゴミ	資料館に引き取られれば民具
使用者にとっては道具	調査者にとっては民具
作業を効率よくこなす手段	地域の歴史や暮らしを知る手がかり
機能から見れば道具	歴史民俗情報に注目すれば民具

図4 道具と民具の違い

たのが図4である。

ある農家のお年寄りが伝統的な鋤を使っていたとしよう。この鋤は現役中は道具であり農具であるが、引退すれば民具と呼ばれる。それを少し詳しく見れば、お年寄りが亡くなられ使われなくなってしまえば愛用の鋤もゴミとなるが、博物館・資料館に引き取られれば民具と呼ばれる。また現役中の鋤でも使用者にとっては道具であるが、外部から訪ねてきた研究者にとっては民具である。

この鋤は道具としては耕起作業のためのものであるが、民具としては地域の歴史や暮らしを知る手掛かりである。したがって同じ鋤であっても、機能に注目すれば道具であり、鋤の持つ歴史民俗情報に注目すればそれは民具と呼ばれる、ということになる。

この道具と民具の違いについての考察結果を整理しなおしたのが、図3第2項の、

- ② 現役の道具も形態や呼称のなかにそれが発達・進化してきた歴史や地域の暮らしの情報をもっており、その情報に注目した場合は現役の道具であっても民具と呼ばれる。

という定義である。

この①②で日常語化した民具の意味合いをほぼカバーできるのではないか。本稿ではこの定義にしたがって、議論を進めることにしたい。

3 末広りの生物進化と天地創造型の民具

生物の分類と民具の分類 これまで民具の分類を試みた多くの研究者は、明記はしていないものの動植物の分類を手本としてイメージしながら分類しているという印象を受ける。

生物学では、動物界・植物界といった大区分の下に、

界 > 門 > 綱 > 目 > 科 > 属 > 種

と分けて基本的な識別単位の種に至る。

民具でもたとえば鋤の場合は、

民具 > 農具 > 耕起具 > 鋤 > 備中鋤

と分けることができる。大から小への段階的 분류の形はよく似ている。

だが決定的に違うのは、生物の場合は進化の系統樹が描かれるように単細胞から多細胞へ、環境に適応しながら枝分かれを繰り返して進化してきたのであり、枝分かれの分岐点には発見されているかいないかは別として、かならず化石生物がいた。ヒト科の分岐点には最古の人類がおり、霊長目の分岐点にはサル類の祖先となった樹上をはね回る小動物がいた。哺乳綱の分岐点には恐竜の繁栄のもとで息を潜めていた胎生の恒温動物がおり、脊椎動物門の分岐点には脊椎の原型となる脊索をそなえた海中動物がいた。現在ではまったく異なる生物であるヒトと大腸菌も、億年単位で歴史をさかのぼれば共通のご先祖に行き当たる。それに対して民具の場合は、鋤と石臼は何千年、何万年さかのぼっても共通祖先には行き当たらない。鋤は耕す道具として、石臼は穀粒を粉にする道具として、人類によって別個に生み出されたものだからである。

ダーウィンの進化論出現以前、西欧人は旧約聖書の天地創造神話にもとづいて地球上のすべての生物は神によって創造されたと信じていた。道具が人類によって用途に応じて別個に生み出されたことに注目するなら、人類は創造神のような存在だ。生物は長い時間をかけて進化し分化してきたのに対して、民具は創造神たる人の手によって突如地球上に産み落とされたのである。民具の分類に当たっては、この生物と民具との根本的かつ決定的な違いを再認識した上で取り組む必要がある。

話を戻して、先の「民具 > 農具 > 耕起具 > 鋤 > 備中鋤」の分類で言えば、人が用途に応じて創りだしたものは末尾の「鋤 > 備中鋤」であり、それ以前の「民具 > 農具 > 耕起具」は、文明化のなかで抽象的思考能力を獲得した人類が頭の中で「耕起具 → 農具 → 民具」と概念を束ね括っていった統括項

目であって実体をもつものではない。鋤は絵に描けるが、耕起具、農具、民具は絵には描けないのである。ならば絵に描け始める「鋤＞備中鋤」をきっちり分類するのが民具の分類なのであろう。それより上位の概念の束ねや括りは、必要に応じていつでも組み替えができるからである。

単位名称と細分名称 この「鋤＞備中鋤」について、もう少し掘りさげてみよう。

博物館・資料館で実際目にするのは備中鋤であり風呂鋤であり唐鋤であるが、それらをまとめた鋤もまた実体を持つ概念として頭のなかにあり、博物館・資料館の外に出れば、「鋤」がコミュニケーションの場では主役である。そして鋤は鎌・臼・下駄・石油ランプと並ぶ民具を区別する基本単位であり、鋤のなかに備中鋤・風呂鋤・唐鋤があるように、鎌には稲刈鎌・草刈鎌、臼には米搗き臼・餅搗き臼、下駄にも石油ランプにもそれぞれ下位の品々がある。民具の標準名といった場合には、この鋤レベルと1つ下位の備中鋤レベルの名称に標準名を設定することになる。そこでその作業を円滑に進めるために、鋤・鎌・臼・下駄・石油ランプといった他の民具と区別する基本単位の名称を「単位名称」と呼ぶことにし、それより1段下位の備中鋤・風呂鋤・唐鋤レベルの名称を「細分名称」と呼ぶことにして話を進めよう。

さて民具の標準名には単位名称と細分名称の2つの階層があるということになると、生物の学名に似ている。生物の分類ではリンネの二名法によって属名と種名をラテン語表記で並べて学名としている。ヒトの属名はホモ、種名はサピエンスで、それを並べたホモ・サピエンスがヒトの学名である。民具の場合は単位名称と細分名称を並べて表示するわけではないが、単位名称の鋤は属名、細分名称の備中鋤が種名に相当するといえよう。野外や動物園・植物園で見る動植物は個々の種であるが、博物館・資料館で見る鋤も具体的には種レベルの風呂鋤であったり備中鋤だったりするのに似ている。猿は学名的にはさまざまな種の猿が存在するが、日常生活会話レベルではもっぱら猿で話が通じているのであり、博物館・資料館には備中鋤・風呂鋤・唐鋤という形で収集され展示されていても、日常生活会話レベルではもっぱら鋤で話が通じているのに似ている。

4 標準名の設定基準

では実際に標準名を設定するにあたって、多くの人々に抵抗なく受け容れられる標準名の設定基準とはどんなものか。思いつくところ列挙してみた。

① 古辞書・古文献に出る歴史的名称を優先

標準名には『和名類聚抄』など古辞書や古文献に出る歴史的名称をまず優先されるべきであろう。この場合、奈良・京都が長いあいだ首都であり文化の中心だったことによって、関西語が基準となるケースが多くなる。たとえば足踏みの米搗き臼は『和名類聚抄』『源氏物語』に出るカラウス（碓）が標準名であり、麦打ちなどに使う唐竿は関東ではクルリ棒という方言で呼ばれているが、『和名類聚抄』に出るカラサオが標準名であろう。

② 江戸発の農具は江戸語が標準名

図8に取り上げた台所用具の千石通しと農具の万石通しは、江戸で貞享元年～2年（1684～85）に相次いで開発されたが、直後に相次いで大坂に伝わったため、大坂では万石通しを千石通しと呼ぶという名称の混乱が起きた。それに対して発祥地の江戸圏＝関東地方では、今日に至るまで物と名称との混乱は起っておらず、農具の万石通しは一般に「万石」と呼ばれている。江戸発の農具は江戸語を標準名とすれば、名称の混乱も避けられる（河野 2005a,b,2006a,b,2008b）。

③ それがないければ地方名で適切なものを採用

靱搦臼には図5に取り上げたように、木製で2人が座位で縄を引く朝鮮系のもので、籠に詰めた粘土に榿の歯を打ち込んで数人で全回転させる中国系のものである。前者の関西での古代語は「搦臼」で、

〔韓国の初摺臼〕



日本の木摺臼の軸受け棧



韓国臼には軸受け棧なし

脱穀・調製具	初摺臼	木摺臼		往復回転・円錐摺り面・放射目	<p>◆乾燥した粉から粉殻を外して玄米を取り出す木製の初摺臼で、二人で対座し左右の縄を交互に引いて摺る。◆摺り面は円錐形で放射目が刻まれ往復回転で摺る。◆朝鮮半島には円錐摺り面・放射目・往復回転の初摺臼があることから、日本の木摺臼は朝鮮系渡来人の持ち込みと考えられる。◆朝鮮半島では立ち姿勢で上臼から突き出した棒をで往復させて粉を摺る。それを座位を好む畿内人が縄引き型に改良したのでであろう。上臼のぶれを防ぐ軸受け棧も日本での付加。◆伝来も改良も6世紀ごろか。◆「臼をひく」は縄引き方式の木摺臼から生まれた言葉。</p>
		全回転木摺臼		鑿目	<p>◆数人がやり木を押し引きして全回転させる木製初摺臼で、東日本では鑿目のものがある。◆鑿目に慣れた木摺臼職人が、新しく伝わった土摺臼や全回転木摺臼を自分の技術に置き替えたもので混血型。◆下臼の軸周りを直径20cm、深さ2cmほど掘り凹めるタイプは、鋸目全回転木摺臼が祖先で関東で使われた。◆回転方法をやり木方式から棹回しに変えたのは東日本的改良。</p>
		土摺臼		全回転・平坦摺り面・分画目	<p>◆松の丸太に鋸で分画目の歯を切った初摺臼で、やり木で全回転させて摺る。九州地方を中心に分布する。◆中国の明代末の『天工開物』(1637)には、初摺臼には土髻と木髻があるとするが、この全回転木摺臼は九州中心に分布することから木髻にあたりと考えられる。◆鋸目を切るため下臼の軸りを直径20cm、深さ2cmほど掘り凹めるのが形態的特徴。</p>
		粘土詰め・歯板打ち込み		中国系	<p>◆籠編みの円筒枠に粘土を詰め、檜の薄板を縦に打ち込んで、石臼のような平面・分画目の摺り面を作り、数人がやり木で全回転させて摺る。◆中国江南地方の土髻が伝わったもので、16世紀後半には近江で使われ、また寛永元年(1624)頃に土摺臼職人が長崎に来たと伝えることから、伝来は何度もあったのだろう。◆木摺臼に比べて効率が良く、江戸時代を通じて徐々に木摺臼に置き換えられていった。</p>

〔中国の初摺臼 土髻〕

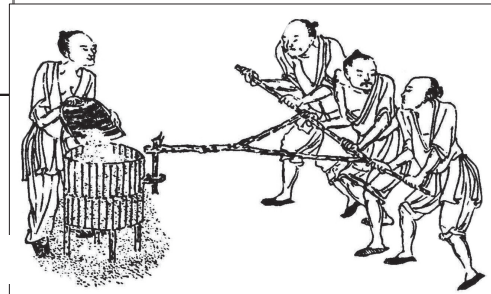


図5 初摺臼の分類と標準名

耕 起 具	犁	中国系犁		◆中国系犁の特長は、①曲がった犁轅(曲轅)、②4つの部材を組み合わせた四角枠構造、③長い犁床(長床犁)である。◆7世紀後半に天智政権が遣唐使を通して中国江南犁を導入、日本向けに改造した政府モデル犁を各地の有力者に配付して、管下に広めさせた。◆畿内は政府モデル犁の影響が強く全域長床犁。七道諸国で曲轅長床犁のある地方は、渡来人の来なかった地域と考えられる。	
		在来犁	中朝混血型犁		◆5世紀末から6世紀にきた第2期渡来人は、関東以南の各地に牛と犁を持ち込んだ。これが日本の犁耕の始まりである。◆その150年ほどに天智政権が中国系の政府モデル長床犁を使用を押しつけたため、朝鮮系犁を使っていた地方では、手慣れた朝鮮系犁と政府モデル長床犁との混血が起こった。◆政府モデル犁から何を受け取るかの選択はまちまちなので、多種多様な犁型が生まれた。日本犁の多様性は混血型の存在による。◆これまで各地の多様な犁型は、地形や土質に合わせて改良した結果と説明されてきたが、じつは渡来人が来たか来なかったかという歴史的事実や、政府モデル犁のどの部分を継承したかの偶然性で決まっていたのである。
		朝鮮系犁		◆朝鮮系犁の特長は、①直棒で前に下がる下降犁轅、②3つの部材を組み合わせた三角枠構造、③犁床がなく犁先で接地する無床犁である。◆663年百済滅亡、668年高句麗滅亡で多くの難民が日本に来たが、天智政権の政府モデル犁配付の波が過ぎた後だったので、影響を受けなかった。したがって朝鮮系無床犁のある地域は百済・高句麗難民の入植地と考えられる。	
		近代短床犁	単用犁		◆三角枠短床犁で、鉄製ボルト犁柱、犁轅と犁身を鉄製ジョイントで繋ぎ、鉄製曲面へらを備えたものを近代短床犁と呼ぶ。◆熊本県の東洋社の始祖が1900年に特許を取ったのが始まりで、深耕向きでそこそこの安定性をもっていることから近代農業の主役となった。◆左反転固定型をダブル犁との対比で単用犁と呼ぶ。
			ダブル犁		◆長野県の松山源造がレバーで反転方向を左右自由に切り換えるように工夫したもので1902年に特許取得、のち各地のメーカーも製造。左反転固定の単用犁に対してダブル犁と呼ぶ。◆江戸時代以前から左反転の在来犁が広く定着していた西日本ではあまり広まらず、東日本では広く普及した。
			二段耕犁		◆1930年に福岡県の深見製造所が開発したもので、前方に付けた副犁で浅く耕したあと本犁で耕すので、楽に深耕ができ、稲株や雑草もよく土に埋まる効果があったが、重量は重い。
	洋式プラウ		◆明治の北海道開拓に導入されたプラウを日本向けに小型化したもので、右反転で双柄が特長。東北地方でよく使われた。		
	人力犁	人引き犁		◆山梨県では夫婦犁(めおとすき)とも呼ばれるもので、妻や子に引かせて夫が犁をもって肩で押しながら耕すもの。研究者の間では人力犁と記されることが多いが、区別のために「人引き犁」と呼ぶことにしよう。◆7世紀後半の百済・高句麗難民が牛馬が手に入らない状況で工夫したのが始まりと考えられる。	
		二人犁		◆朝鮮系三角枠犁の犁轅と柄を細く長くして、2人が呼吸を合わせて鍬のように田畑を耕起するもの。中部地方を中心に山間地や氾濫原に分布する。◆人引き犁と同じく、朝鮮半島からの古代難民が牛馬が手に入らない状況で工夫したのが始まりと考えられる。	
		後退引き犁 (作条犁)		◆『農具便利論』(1822)の「源五兵衛犁」が初見で、麦の畝間を後退しながら引き、畝に土寄せした。◆江戸時代になって初めて日本人の発明農具が現れる。千歯抜きも万石通しも職人の発明だが、源五兵衛犁は農民の発明の嚆矢であろう。◆南関東には鋳物先を付けた鍬を後退引きするインガ(引鍬)が使われた。	

図6 犁類の分類と標準名

後者が出現して以降は前者は「木臼^{きうす}」、後者は「土臼^{とうす}」と呼び分けていた。ところで「木臼」では餅搗き臼の木製臼なので混乱が生じるため関西語は標準名には使えない。それに対して東北地方では、木製のものを「木摺臼^{きずるす}」、粘土に榿の歯を打ち込んだものを「土摺臼^{とずるす}」と呼び分けており、この双方には「摺臼」の言葉が入っているので餅搗き臼との混同も起こらず、名は体を表した適切な言葉となっている。そこで東北地方語の「木摺臼」「土摺臼」を標準名としよう（河野 2008a）。

④ それらもなければ内容を的確に表現した造語で対応

人が引いたり押したりする人力犁に関しては、内容的には図6の下部のように3種類あるが、そのどれもが研究界では「人力犁」と呼ばれてきた。これでは区別がつかないので全体を括る単位名称を「人力犁」とし、その下位にそれぞれの細分名称を設定するのが適切と考えられる。

まず山梨県で夫婦犁^{めおとすき}など呼ばれ、妻や子供が引き夫が犁を押しながら耕す犁は「人引き犁」がイメージに合っている。第2欄の華奢な三角枠無床犁で犁轅と犁柄を長く伸ばして2人の男が呼吸を合わせて耕す犁は飛騨ではヒッカと呼ばれるが、山梨県では「二人犁^{ふたりすき}」とも呼ばれており、これが内容を的確に表しているので「二人犁」を標準名としよう。『農具便利論』で源五兵衛^{げんごべえからすき}と呼ばれるものは、長床犁の犁床の転用から始まったと考えられる中耕除草用の中引き犁で、大小さまざまなバラエティーがあるが、他の2種との区別を明確にする意味から引き方にもとづいた「後退引き犁」が適切であろう（河野 2010b）。

5 標準名設定は歴史的展開を踏まえて

鋏の細分名称である「備中鋏・風呂鋏・唐鋏」は、用途の違いで生まれたもので、系譜も違い出現時期も違う。鎌・臼・下駄・石油ランプそれぞれの細分名称レベルの民具も、用途の違いで生まれ、系譜も出現時期も違うという点は同じであろう。

民具の標準名を研究課題に掲げる神野班の研究会で川崎市民ミュージアムの高橋典子氏の灯火具の分類の発表があった。寄贈された灯火コレクションの整理と特別展に向けての整理と分類の取り組みの内容で、コレクターの世界の分類を参照しつつも灯火具の歴史的展開を踏まえて整理するという観点からの分類であり、歴史的展開に沿って分類されているので、この高橋分類にしたがって収蔵庫の灯火具を整理すれば、整理作業を通して灯火具の歴史や地域の歴史が蘇ってくることになり、気の重い民具整理が地域の歴史の再発見に繋がる楽しい場に転化するという力をもった、素晴らしい分類であった。

千石通し・万石通しを例にとれば、『民具マンスリー』誌上でその分析をおこなった2005年以前では、図7に見るように辞典類の解説は混乱を極めていて、『日本民俗大辞典』のいうように「その区別については、万石は千石の改良型、また大型と小型の違いともいうが明確ではない」という状況であった。この混乱状況を打破すべく千石通し・万石通しの成立過程とその後の展開の解明に切り込んだのが河野の「千石通しの成立と伝播」(一)(二)(2005a, b)と「万石通しの発明と伝播」(一)(二)(2006a, b)で、江戸時代の記録、事典、農書や明治農具絵図に広く当たって資料を集め、記事の信頼度を吟味しつつ民具の実例も多数調査して成立と展開の歴史過程を復原し、名称混乱の原因も突き止めた。その成果を箇条書きにすれば次の通りとなる。

①『和漢三才図会』(1712)の重ね箱型の千石籴(千石通し)は、米を搗いた後、白米と糠とを選別するもので、炊飯前の精白作業の一環であり、農具ではなく台所用具である。ところが「農具類」に収められたため、農具と勘違いされたのが混乱の一因である。

②万石通しは唐箕の一番口から出てきた玄米から摺れ残りの粃を選り分けるもので、これは農具で形は可動脚型である。千石通しは貞享元年(1684)に江戸で発明されたもので、万石通しはそれをヒントに同年か翌年、江戸で発明され大ヒットした。

書名	年	項目	掲載図	解説文
『国史大辞典』	1987	千石筥		籾摺りの後の玄米と粳とを選別する日本特有の穀物選別用具(中略)江戸時代中期以降、経済の発展に伴って唐箕と千石筥が使われるようになった(三橋時雄)。
『新編日本史辞典』	1990	千斛筥	可動脚型	穀粒を選別するための農具。(中略)傾斜した細長い筥の上から、春米を流下させて、米と糠をふるい分けたり、穀粒の選別に用いたりするのに用いる。
『広辞苑』第四版	1992	千斛筥・千石通し	可動脚型	傾斜した筥の上端から春米を流下させ、糠をふるい落して米だけを選び分ける。穀粒の選別にも使用。
	1992	万石筥・万石通し		千斛筥の改良型で、二～三枚の筥から成る。傾斜した筥の上端から摺米を流下させ、玄米をふるい落して粳と選り分ける。
『日本民具辞典』	1997	千石通		主として精米に用いた選別用具の一種。機能・構造ともに万石通しとかわらない。(中略)精白中の糠や屑米を、斜めに固定した網柵の上を滑落させて分離する。
	1997	万石通		米の選別用具。千石卸・万石卸ともいう。機能・構造ともに千石通と同じである。一度に処理できる量が多いことから万石通の名が起こたとされるが、実際の処理量に差がなく、商品としての販売効果を求めた命名であったと考えられる。
『日本民俗大辞典』上	1999	千石どおし	可動脚型	籾摺りの後、唐箕で選別した玄米を、さらに網目を通して精選する日本独特の農具。一般的には網目は上部が細かく、下部が大きくなっている。万石どおしと称する地域もあり、その区別については、万石は千石の改造型、また大型と小型との違いともいうが明確ではない(小坂広志)。
『日本国語大辞典』第二版	2002	千石通・千斛筥	重ね箱型	傾斜した細長い筥の上から春米を流して、米と糠をふるい分けたり、穀粒の選別に用いたりする。
	2002	万石通		せんごくどおし(千石通)と同じ。

図7 辞典類の千石通し・万石通し


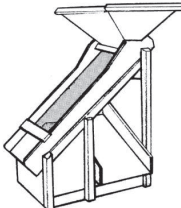
台所用具	米・糠の選別	千石通し	大坂型	江戸型	① 貞享元年、江戸 ◆永らく農具とされてきたが、米を搗いたあと白米と糠を選別するものなので、台所用具。◆傾斜網柵を使った自動選別器で、篩のように毎回揺すって捨てる手間を省いた画期的発明◆江戸大門通りの釘屋喜兵衛が貞享元年(1684)に開発。喜兵衛は蒸籠をベースに工夫したようで、江戸製には機能に無関係な段組構造が残る。◆毎日多くの飯を炊く大名屋敷や大店向き。酒造業・精米業などでも使われた。◆民具例はきわめて少なく、10指に満たない。◆発売まもなく大坂に伝わりコピー製作。
			江戶型	④ 江戸後期、江戸 ◆千石通しを一般家庭向きに小型化したもの。「五百石通し」はコンパクトさが売り物の命名。◆形態からすれば、千石通しではなく農具の万石通しをヒントにしたものか。◆東京都の江戸周辺と千葉県に分布するが他県では見られないローカルな民具。◆開発は近世後期の江戸か。	
農具(脱穀・調製具)	籾・玄米の選別	可動脚型			② 貞享元々2年、江戸 ◆千石通しをヒントに江戸で開発された農具で、唐箕の一番口から出てきた玄米の中から摺れ残りの籾を選別する道具。全国に広まったヒット商品。◆後脚を可動式にして傾斜網柵の角度を変えて選別の調整をするしくみ。◆「万石通し」という名称は、千石通しの後に出現したことを物語る。◆千石通し発売直後の貞享元年か2年に江戸の農具商が開発か。◆大坂では万石通しを千石通しと呼ぶ名称混乱が起きた。
		固定脚型			③ 貞享2々3年、大坂 ◆江戸発の可動脚型万石通しをヒントに大坂で開発されたもので、可動脚型では床に落ちていた玄米を排出板で受けて側面か背面に出すもの。◆可動脚型とともに西日本の大坂流通圏に広まり、各地で様々なバラエティーを生み出した。◆古い紀年銘には農人橋京屋とあることから近世大坂の農具メーカー京屋の開発か。

図8 千石通し・五百石通し・万石通し

③江戸で発明された千石通しと万石通しは、ほとんど同時に大坂に伝わったため、大坂で農具の万石通しを千石通しと呼ぶという名称の混乱が起こった。この名称の混乱は、大坂製の万石通しとともに西日本や日本海側の東大坂経済圏に広まった。

④明治の『古事類苑』（1908）は、台所用具の千石通しを農具と誤認して脱穀・調製具の項に収録し、農学者の古島敏雄はそれに気づかず『日本農業技術史』（1947, 1949）で千石通しを農具として記述したため、これが学界の通説となった。その結果、高等学校教科書では千石通しを標準名とし、『和漢三才図会』の重ね箱型を挿絵にする出版社も多い。

この検討結果を踏まえれば、台所用具の米・糠選別器は「千石通し」、農具の玄米・粳選別器は「万石通し」とするのが適切である。なお文字に関しては、『和漢三才図会』の「千石筴」の「筴」の字は江戸時代でも少数派で、「通」の字も江戸時代からよく使われているので、標準名の表記も「千石通し」「万石通し」で問題はない。

以上の成果を表にまとめたのが図8で、挿絵とともに歴史的展開過程を踏まえた解説文を加えた。こうした表に沿って民具整理をすれば、標準名の同定と同時に背景にある歴史が読み取れるので、民具整理は民具から地域の歴史を読み解く第一歩となるであろう。

6 先へ行くほど分化する生物、先で混血する民具

生物の分類と民具の分類の違い 先に生物の進化は何億年の昔から進化を続けて末広がりになり分化してきたのに対して、民具は人の手で必要に応じて天地創造型で生み出されたという違いを指摘したが、もう1点の大きな違いは、生物の進化は末広がりでも5本の指のように先に向かって広がる一方なのに対して、人の製作する民具では進化の先で混血が起こりうる。指に譬えれば人差し指と中指が爪の辺りで繋がってしまうという生物では考えられないことが起こるのである。

いまAという形態の民具とBという形態の民具のほかにABの要素を併せ持った民具が見つかったでしょう。これがAとBとの混血型なのであるが、混血型と認識されたならばこの民具はAB型と名づけるべきであろう。ところが民具も生物のように進化の先ではかならず分かれるものだという先入観にもとづき、AでもBでもないという理由からC型と名づけたならば、とたんに民具が展開してきた歴史が見えなくなってしまう。

われわれは遊園地で数人の集団を見た場合、男女別や年齢格好、それに顔つきから無意識にお父さんお母さんと3人の子供の5人家族と認識し、別の集団では親子3人と祖父母の5人家族と自動的に認識する。これは瞬時の判断であるが、幼児期からの人生の経験を踏まえたもので集団の構造を的確に捉えており、民具の分類にもこうした感覚が求められる。もし家族を経験していない宇宙人がこうした5人グループを見たらどうなるか。彼が身長の高さと肥満型かやせ型かという体型から分類したなら、とたんに集団構造は見えなくなる。分類することがかえって真実の把握を遠ざけてしまうのだ。民具の分類にあたってはこの点を注意しなければならない。

犁の3分法とその限界 犁の分類では犁床の有無と長短を規準とした長床犁・短床犁・無床犁という3分法が永らくおこなわれてきた。農学者たちはこの3分法をベースに分類の精緻化を試み犁の発達史を探ろうとしたが、分類項目が複雑になっただけで、そこから歴史は見えてこなかった。なぜか。理由は簡単、3分法は犁による効率のいい深耕が求められていた時代背景のもとで耕深性能に関係ありと見られていた犁床の有無・長短を規準にしたものであり、歴史を探るために設定されたものではなかったからである。長床犁・短床犁・無床犁という3分法は人にたとえれば足元だけを見て、ハイヒールかビジネスシューズかブーツかで見分けようとしたのだが、顔つきも体型も見ないで人のトータルな見分けなぞ出来るわけではない。

民具の分類に当たっては、いま自分は何を知りたいのか、何の目的で分類するのかを明確に自覚し、そのためにはどんな分類法が可能なのかを探る姿勢で始めなければならない。それを自覚しない分類は分類のための分類に陥って、果ては出口のない洞窟のなかでミイラ化してしまう。

犁の新3分法 犁はカラスキという呼称からしても日本人の発明ではなく中国か朝鮮半島から伝来したものである。ところが図6の在来犁の欄にみるように、中国犁は四角枠長床犁、朝鮮犁は三角枠無床犁というように形や構造がまるきり違い、伝来から千数百年経た民具の中にもこの違いははっきり継承されているので見分けがつく。

中国系犁と朝鮮系犁との見分けの指標は、図6にも示したが次の通りである。

中国系犁：①4つの部材を組み合わせた四角枠構造、②曲がった犁轆（曲轆）、③長い犁床をそなえた長床犁

朝鮮系犁：①3つの部材を組み合わせた三角枠構造、②直棒で前に向かって下がる下降犁轆、③犁床がなく犁先で接地する無床犁

この両者の要素を混在させたものは混血型と括っておこう。混血ならば中国系要素と朝鮮系要素のどこを採り入れるかによって多種多様な組み合わせが生まれる。これが日本の犁の多様性の成因であった。農学者たちはこのことに気づかず、日本の犁の多様な犁型は各地の地形や土質に合うよう改良を重ねた結果だと信じ込んで、親世代の中国系犁・朝鮮系犁と子世代の混血型犁を同列に並べて、長床犁・短床犁・無床犁という3分法に当てはめて細分化を試みたため、先が見えなくなったのである。

以上の検討結果を踏まえて一覧表にしたのが図6である。犁の新3分法は、民具が地域の暮らしや歴史の語り部となった時代に見合ったもので、整理作業のなかで地域の歴史が見えてくるという分類法なのである。

7 標準名で民具研究を21世紀版にバージョンアップ

遺物化した民具を活かすための標準名 原点に戻ろう。われわれはなぜ民具を集めるのか、収蔵庫スペースもないのになぜ無理して民具を集め保管しようとするのか。これは民具が地域の暮らしや歴史の語り部だからである。民具とは「民衆の使う道具のうち現役を引退して地域の暮らしや歴史の語り部となったもの。昔の道具」という再定義は、この現実に沿ってまとめ直した21世紀バージョンの民具の定義である。

1970年代に盛り上がった民具研究は、民俗学系の民具研究者を主力として民具の使い手や製作者からの聞き取り調査によって全国展開し、ゆたかな成果を重ねてきた。標準名に対する消極的姿勢は、民具研究が聞き取り調査により地域研究として展開してきた状況のなかで、「何も無理して標準名なんか作らなくても」という雰囲気の中で醸成されたものと考えられる。しかしながら21世紀も10年を経過したいま、状況は一変している。伝統的な民具を作り民具を使い民具とともに暮らしてきた世代はおおむね鬼籍に入られ、収蔵庫のなかでは民具は聞き取り情報を失った遺物と化して、好むと好まざるとにもかかわらず、物言わぬ民具から情報を引き出す研究にシフトせざるをえなくなっているのである。この遺物化した民具から情報を引き出すための必須の条件が民具の広域比較であり、広域比較を効率的かつ飛躍的に進める手段がデータベースであり、データベース化の前提として必須の作業が標準名の設定なのである。

データベース化で若手研究者を広域比較の主役に では遺物化した民具から情報を引き出す研究への学術界あげてのシフトをどう実現するのか。大まかなプランを描いてみよう。今まで聞き取り調査で成果をあげてきた民俗学系の民具研究者に、遺物化した民具の研究を期待するのは筋が違っている。研究は一面では趣味の延長であり、好きな分野で研究してこそ成果はあがる。いま地域の話者を訪ねての聞き取り調

査は最後の最後のチャンスなので、民俗学系の民具研究者にはここで成果をあげてもらおうではないか。その一方で若手の学生・院生さんたちは、もう伝統的民具を知らない世代である。ところがこの世代はパソコンにインターネットにデータベースに滅法強い人たちである。民俗担当の研究者が協力して、民具・民俗に関心をもちながらテーマが見つからなくて悩んでいる学生・院生さんたちを、民具のデータベース化や広域比較に呼び込んで、研究の大きなウェーブを起そうではないか。民具の広域比較は未開拓の分野であり、テーマがごろごろしている伸びしろの大きい分野である。そしてこれまで標準名の設定に消極的だった研究者も標準名のサポーターに回る形で、民具研究界総力をあげて民具の標準名設定に取り組もうではないか。

【参考文献】

- 河野通明 2004 民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原 『ヒストリア』（大阪歴史学会）188
- 2005 a 千石通しの成立と伝播（一） 『民具マンスリー』（神奈川大学日本常民文化研究所）38-7
- 2005 b 千石通しの成立と伝播（二） 『民具マンスリー』（神奈川大学日本常民文化研究所）38-8
- 2006 a 万石通しの発明と伝播（一）－近世農書・明治農具絵図から見た万石通し－ 『民具マンスリー』（神奈川大学日本常民文化研究所）39-6
- 2006 b 万石通しの発明と伝播（二）－江戸での発明、大坂への伝播の詳細－ 『民具マンスリー』（神奈川大学日本常民文化研究所）39-8
- 2007 日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型 第2回国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 人類文化研究のための非文字資料の体系化』2（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議）
- 2008 a 身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原－東北地方の木摺臼調査からの古代日本列島の民族分布復原への見通し－ 『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』（神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議）
- 2008 b 高校教科書にみる千石通し・万石通し 『民具マンスリー』（神奈川大学日本常民文化研究所）41-7
- 2010 a 「民具からの歴史学」への30年 『商経論叢』（神奈川大学経済学会）45-4
- 2010 b 民具から見た百済・高句麗難民の動向 『商経論叢』（神奈川大学経済学会）45-4